



しじゅう ちょうぜんかん しの
私塾 長善館を偲ぶ



発行;粟生津地区協議会

「わがむら」発行の趣旨 私塾・長善館は、燕市の粟生津地区にありました。そこに住む私たちには末永くこの遺産を守り後世に伝えていく責務があります。それには、地域の大人も子供も「地域の宝」である長善館に足を運んで、関心をもち、よく理解し、さらには誇りに思っていくことが大切です。その一助として、本紙『わがむら』を年2回発行しています。

第7回 保育園児と老人会の長善館かるた会 年長・年中児チームが圧勝!

10月17日、粟生津保育園の年長児及び年中児チーム、粟生津地区の寿美礼会・寿会の老人会チームが各々8グループに分かれての「長善館かるた会」で熱戦を繰り広げました。

今年の成績は、1回戦の「つばめっ子かるた」では8戦全勝で園児チームが文句なしの勝ち。2回戦の「ジャンボかるた」は勢いよく取り札に飛びついて行く園児チームが27枚対17枚で勝ち。最後の3回戦「百人一首の坊主めくり」は坊主がでるか姫がでるかハラハラ、ドキドキの大接戦でしたが5勝対3勝で園児チームの勝利。その結果、3戦全勝で園児チームの大きな花丸の優勝でした!

今年も満杯の長善館の会場は、笑顔と歓声と熱気にあふれ、大盛会のかるた会となりました。



「つばめっ子かるた」で長善館に関する取り札と読み札の言葉を紹介し

長善館 心受け継ぐ つばめっ子 鈴木虎雄 文化勲章 漢詩人



新企画がスタートしました!

あおうづ 歴史散歩 No.1

① 長善館址碑 燕市粟生津99番地



粟生津の地に 鈴木文臺が私塾長善館を創設し、以来3代4先生が幾多の人材を輩出された偉業を永く後世に伝えたいとの願いから建設された址碑である。

1959(昭和34)年「長善館址碑建設世話人会」(星野甚四郎会長)が設立され、建碑敷地を鈴木邸の一隅と決めた。碑石は中魚沼郡

津南町産出の一番大きな見玉石を選定し、台石はそれに見合う重量8トンの石にした。碑石や台石の山出しを請け負った石工は、命懸けの運搬作業の連続で苦労したという。

五大字「長善館址碑」及び碑陰の「撰文」は、文臺の孫で京都大学名誉教授であった鈴木虎雄博士が揮毫した。また、鈴木博士が記した「教也者は善を長じ 其の失を救う者也」が銅板に刻まれて、建碑に関する記事と共に碑石と台石の間に鎮められた。

この址碑建設の寄附者は1,024名、収入は93万円と多額に上った。1960(昭和35)年8月に建碑式が盛大に行われ430名が参列した。

参考文献;「長善館餘話」長善館史蹟保存会

鈴木虎雄の撰文が刻まれた址碑の裏側 →



シリーズ 長善館 Q&A NO.20

長善館に関する質問に対して、分かりやすく説明していきます。参考文献は『長善館餘話』『越北の鴻都 長善館』『長善館ものがたり』など長善館に関する史料です。なお、子どもたちも読めるようにフリガナを付けています。

質問 ⑭ 長善館で学んだ著名な塾生たちの業績を教えてください。

その4-3 学問研究に励んで高い功績を上げた塾生たち

⑯ 鈴木虎雄

1878(明治11)年～1963(昭和38)年
現 燕市(旧吉田町粟生津)出身



鈴木虎雄

鈴木虎雄は明治11年に粟生津村の長善館に生まれました。父は長善館二代目館主の鈴木惕軒であり、その五男です。号は「豹軒」です。

4歳で粟生津小学校初等科に入学、8歳で卒業して塾舎が新築された長善館に入門します。

1884(明治17)年には上京していた長兄の鈴木柿園が帰郷して英語や数学も教え始め、父・惕軒との二人に師事しました。

1890(明治23)年12歳で上京して東京英語学校に入学します。成績優秀で優等賞牌を度々受けました。

その後、東京府尋常中学校に進んでから杜甫の詩に心を奪われ、寝食を忘れて読みふけたそうです。旧制第一高等学校(現在の東京大学)に進んでからは中国の多くの詩人の作品を読んで、自分の生き方を考えていきました。

次に、東京帝国大学文科大学漢学科に入学してからはますます哲学人生に没入するとともに、世界の諸国と日本の外交問題に目を広げていきました。この頃、自分の考えを漢文や漢詩にして盛んに新聞に投書していました。

1901(明治34)年、大学卒業後に日本新聞社へ入社します。長善館時代の先輩だった桂湖村の紹介でした。湖村は新聞社内ではすでに漢詩人として頭角を現しており、漢詩に関する仕事をはじめ就職生活などすべての面で支援してくれた先輩でした。



桂湖村

また、正岡子規も入社していて、虎雄が学生時代に投稿した和歌を採用掲載して、虎雄の歌人としての力量を評価していました。入社後には、子規との交遊がありました。

日本新聞社に2年間勤務した後、1903(明治36)年には台湾日日新報社に転職して漢文部主任になります。間もなく日露戦争が始まり、不慣れた外地の生活と戦争の危

険のため、1905(明治38)年に帰国し、東京同文書院教授、東京高等師範学校講師を務めます。なお、東京高等師範学校の勤務では旧下田村出身で後に漢学者・漢字学者となる諸橋轍次を教えました。



諸橋轍次

1908(明治41)年、虎雄は日本新聞社の創始者であった陸羯南(政治評論家)の次女・鶴代と結婚します。

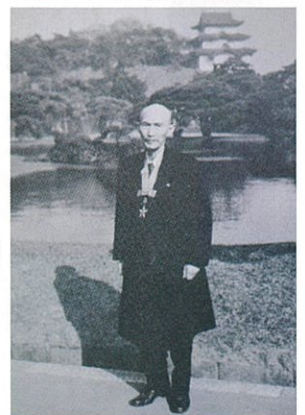
同年に東京高等師範学校の教授となり、その8ヶ月後には京都帝国大学文科大学の助教授に迎えられます。そこでは1919(大正8)年に教授、1938(昭和13)年には名誉教授となり、30年にわたって勤務しました。

虎雄はその間の1916(大正5)年から2年間、中国に留学します。帰国後には、中国語学中国文学に講座を増設して担当の教授になります。同時に学長の推薦もあって、文学博士の学位を獲得しました。

同じ京都帝国大学に勤務して虎雄に師事した吉川幸次郎教授(中国文学者)は、「鈴木博士の代表著書『支那詩論史』は中国の歴史を組織的に研究したものとして世界最初の労作です。発刊されるとすぐに中国で訳本が二冊刊行されました。陶淵明、杜甫、白楽天、↓皇居で文化勲章を受章陸放翁の全作品について懇切で正確な注釈が付けられ、後進の研究者はみなその恩恵を受けたものです。さらに大きな貢献は中国研究が従来の漢字の方法から、純粋な文学の研究とされるようになったことです。」と述懐されています。

虎雄は1958(昭和33)年に文化功労者、1961(昭和36)年に文化勲章を受章しました。翌年、故郷の粟生津小学校で受章祝賀会があり、当時の小中学生は体育館で文化勲章を間近で見せてもらいました。

1963(昭和38)年、風邪をこじらせて85歳で亡くなり、今も粟生津にある鈴木家の墓地に眠っておられます。



↓文化勲章を見る中学生

